

## エッセイ

### 夏の思い出

渡辺尚夫

夏が来れば思い出す、遙かな尾瀬…。という歌があるように、中高年にとって尾瀬は聖地のようなものである。鳩待峠、大清水そして沼山峠から毎年30万人以上の登山者がやって来る。6月から7月にかけて多い日には1日1万人が水芭蕉を求め入山する。この歌がラジオから流れたのが昭和24年。この年に生まれた人もすでに57才になった。この時代に生まれた人、つまり団塊の世代が、「夏の思い出」と共に聖地尾瀬へと向かったのである。

団塊の世代の特徴のひとつに平等がある。良い意味でも、悪い意味でも彼らは平等が好きだ。中高年の登山者が遭難し新聞を賑わす中には、そんな因子が隠されているように思える。彼らと山へ登った時のことである。極限状態に陥ったときの彼らの行動は、一人強いリーダーシップを発揮する人間が現れるのではなく、お互いを牽制し自己主張が幅を利かせ、判断が多様化するという最悪の状態に陥ってしまう。そんな彼らは、この歌と共に尾瀬が好きなのである。多い年には60万人を越した尾瀬の入山者。その大半は彼ら団塊の世代なのではないだろうか。来年は、団塊の世代が退職する年、圧倒的な人口比率を持つ彼らのリタイアに社会がパニックを起し、2007年問題と言われている。不景気の影響で世代毎の人材育成が滞り、スキルの伝承がままならない状況がそのベースにある。雇用の延長、技能職の新卒採用で、企業はこのハードルを乗り越えようとしている。

水芭蕉は、尾瀬だけではない。鬼無里や柵池にも立派な水芭蕉の群落がある。しかし、一人が尾瀬と言え、みんなが尾瀬を向いてしまう。ただでさえ、その傾向が強い日本人に団塊の世代が輪をかけているように感じる。自然と人間の共生をテーマに、尾瀬は各種団体や大家である電力会社に守られてきた。自然を守ることと、人が楽しむことが共生なのだろうが、この両立は非常に難しい。Nature と言う言葉が日本に入って来たとき、日本人は自然(しぜん)と訳し、日本人本来の自然(じねん)と言う考えを忘れてしまった。(しぜん)は、人間から観た自然であり、(じねん)はその自然の中に人間も含まれている。本来の日本人から見れば自然保護などという行為自体おかしいものと言えよう。人間は自然を支配し、その自然を守ってあげるのが人間だと言わなければならない。八百万の神々を敬い恐れしてきた日本人は、そんな大それたことは考えない。ロカビリーを聴き、ビートルズを愛した彼らが去ったら、(じねん)に戻るチャンスがやって来る。

昨今、地方自治体では自然エネルギーを利用する取り組みが流行っている。我が自治体もマイクロ水力発電を尾瀬の大家と手を組んで始めた。北隣の東京都水道局は太陽光発電に夢中であり、浄水場内の沈んでん池やろ過池に次々とパネルを貼り付けている。一方、南隣の横浜市水道局は、テロ対策のため、ろ過池に太陽光発電パネルを並べた老舗である。そんな太陽光発電に挟まれた川崎市は、隣があつと驚く水力発電なのである。人と同じことはやらないのが川崎気質で、日本初のコンピュータ導入、日本初のプリペイドカード、バキュームカーの発明などで紹介してきたところである。では何故、他都市が水力発電に取り組まなかったのだろうか。発電効率では太陽光や風力を圧倒しているが、全国でも水力発電は非常に少ない。東京電力が見積もったところ、水道・下水道での未利用エネルギーは40万kW有り、非常に有効な手段であるはずだ。

単に技術的な問題をクリアすれば設置できる太陽光発電と違い、水力発電には霞ヶ関という大きなハードルが横たわっている。河川法、水道法、地方自治法、電気事業法など全てをクリアしなければ発電機は設置できない。日本初としてこれらをクリアするには、霞ヶ関の頭を柔らかくする必要があった。法律から逸脱する想定外の問題と、京都議定書に批准した国のメンツとの板挟みになり、回答はなかなか出ない。

尾瀬の入山者数は、平成8年の64万人をピークに、減少を続けている。平成8年は彼らが最後の40代を過ぎた年である。反面教師が存在しなかった彼らは、独自の発想で新しい日本を造ってきた。しかし彼らは、自分の得た知識や技術を自己の中に閉じこめ優位に立つという方法で、生き延びて来たため、彼らが残した莫大な財産を、継承してゆくのを困難にしている。皆が太陽光発電をするから太陽光発電なのだというパワーは、そんな団塊の世代のパワーと似ているように思える。彼らを反面教師にし、(じねん)を重んじた新しい方法で、尾瀬と日本を守ってゆくのは、誰であろう。